

琉球大学学術リポジトリ

1930年前後の八重山女性の植民地台湾への移動を促したプル要因
ー台湾における植民地的近代と女性の職業の拡大をめぐってー

| | |
|-------|---|
| メタデータ | 言語: 出版者: 琉球大学移民研究センター 公開日: 2018-11-13 キーワード (Ja): 八重山女性, 植民地台湾, 境界, 植民地的近代, 女性の職業 キーワード (En): Yaeyama Women, Colonial Taiwan, Boundary, Colonial Modernity, Women's occupation 作成者: 金戸, 幸子, Kaneto, Sachiko メールアドレス: 所属: |
| URL | https://doi.org/10.24564/0002010157 |

訂 正

『移民研究』第3号に、訂正箇所があります。以下のように訂正お願いします。

- ・ 12 ページ、23 行目

誤：女学校 → 正：中等教育機関

- ・ 25 ページ、1 行目

誤：与那国遷 (1992) → 正：宮城政八郎 (1993)

1930年前後の八重山女性の植民地台湾への移動を促したプル要因 —台湾における植民地的近代と女性の職業の拡大をめぐって—

金戸幸子

- I. はじめに
- II. 八重山から植民地台湾への人の移動の概要と特徴
- III. 八重山女性の移動を促した植民地台湾のプル要因
- IV. 女性の職域の拡大と八重山女性における職業意識の芽生え
- V. 結論

キーワード：八重山女性，植民地台湾，境界，植民地的近代，女性の職業

I. はじめに

1. 問題意識と本稿の目的

本稿は、日本植民地帝国末期の1930年前後において八重山から植民地台湾への大量の人口移動を促したプル要因について、とくに多く行なわれた八重山女性の移動に焦点をあて、台湾での就労構造などのマクロデータと、インタビュー調査や手記により得られたミクロデータを組み合わせて実証しようとするものである。

沖縄本島的那覇から八重山諸島(以下、「八重山」)の中心地である石垣島までは411km、日本最西端の与那国島から台湾まではわずか約111kmの距離である。秋の晴れた日には台湾の島影を肉眼で見ることができ、台湾のテレビ放送も普通に受信することが可能である。このような地理的位置にある八重山は、日清戦争以降、日本植民地下の台湾と社会、経済的に深いかかわりを持つようになり、1945年の終戦までの八重山と台湾の間では、コロニアリズムの下でひとつの生活圏が形成されていた。

とりわけ八重山出身者の出稼ぎや移住が増加した1920年代の台湾は、1919年に初の文官総督として田健治郎の第八代台湾総督就任による「内地延長主義」によって植民地経営が本格化するなかで、都市化とともに労働市場が発達し、教育も整備されてくるようになった時代である。1917年以降、石垣島では八重山住民を対象にした新聞が発行されたが、当時の新聞記事や新聞広告には、大阪や鹿児島、那覇に関連する記事に比べて、産業経済、人事異動、各種試験や学校の合格者から旅行雑感などゴシップ的な話題にいたるまで、台湾に関連する記事が多く掲載されている。また、石垣島には、台北に本店を持つ商店や会社の出張所や支店が多く構えるなど、これらの状況から、いかに八重山の社会経済が植民地下の台湾に依存していたかが明らかである。

こうして八重山が日本の植民地支配によって急速に資本主義化、工業化、都市化を遂げ

ていった台湾の経済圏に入るようになると、沖縄本島よりも経済的に後発的な地域であった八重山が、一転して沖縄のなかで最も文化水準の高い「豊かな」場所へと変身するようになった。とくに 1920 年代後半以降から戦後初期にかけての与那国島では、島内に流通している紙幣の大半が台湾銀行紙幣によって占められるなど、まさに台湾の経済圏にあったようなものであり、「台湾ありてこの島あり」と形容されていたほどであった。

八重山に行くと、「八重山って、お年寄りもきれいな標準語を話して、食事とか、暮らしぶりも沖縄本島より何となく内地に近い感じがするよね」というような語りが随所で聞かれる。筆者自身少なからずそのように感じる。なぜ八重山は沖縄本島よりも内地から地理的に遠いにもかかわらず、生活や暮らしぶりにおいて沖縄本島よりも内地的な要素が感じられるのだろうか。

2. 先行研究の検討と本稿の分析視角

日本植民地主義の特色のひとつとして、統治に直接関与する軍人や政府関係者、資本家のほかに、多数の民衆が植民地に移り住んだことが指摘されている（高崎 1993）。八重山から植民地台湾への人口移動に関する研究は、これまで看過されがちな地域間の人の移動ではあったが、この 10 年程度の間徐々に関心を持つ研究者が現れ（水田 1998, 2003; 松田 2006）、また、八重山では台北への「女中」¹⁾ 出稼ぎが数多く行なわれたことが述べられている（浦崎 1994, 2000; 水田 2003）。

浦崎（1994）は、近代沖縄における典型的な女子労働として、①紡績女工、②海外移民・出稼ぎ、③台湾出稼ぎ女中の三つを上げている。浦崎によれば、これら三つの女性労働は沖縄の貧困から排出された社会的背景を持ち、「大量の若い女性たちが遠く故郷を離れ、海を越えて、自らの意思で異文化社会、新しい労働環境下で家のために働いた」という共通点がある。①と②の調査研究の蓄積は国際的にも多く、沖縄県内の地域史の取り組みも行政レベルで進展しているが、台湾出稼ぎ「女中」という植民地時代の特異な時代性を持った女性労働の形態についての調査研究はほとんどなされていない。浦崎は、沖縄から日本内地への紡績女工、移民女性たちは、内地の文化受容のチャンスは極めて少なかったが、植民地台湾の「女中」はどうであったのか検討の余地があるとしている。一方、水田（2003）は、1920～1930 年代の台北における沖縄出身「女中」について、職業紹介所の統計をもとに労働市場での位置づけを行い、さらに「女中」の生活史や新聞・雑誌記事における「女中」をめぐる言説の検討を通して、出郷の過程や「女中」という労働形態の具体的状況を明らかにしている。

また、「女中」も含め、八重山から植民地台湾への移住・出稼ぎは、移動当事者の給料の額や留守家族の経済状況とはあまり相関関係がみられていないことなどから、従来の沖縄移民研究²⁾ が指摘してきたように（金城 1974; 石川 1974: 387）、必ずしも経済的要因、

貧困要因だけが背景にあるわけではないことが指摘されている(浦崎 2000; 水田 1998, 2003; 松田 2006)。この点に関して、松田(2006)は、昭和初期に日本内地や沖縄本島、宮古などから多数の移民が石垣島などに渡ってきたにもかかわらず、なぜ多くの八重山の人々が台湾に渡るようになったのかについて、ブルデューの理論を援用しつつ、その歴史社会学的な要因について分析を行っている。松田によれば、1920～30年代の八重山から植民地台湾への移動の前提として存在していたものは、八重山の人々の「職業」に対する意識の変化であると捉える。つまり、八重山で生じた資本主義システムへの移行という社会経済構造の変化と、それにともなう人々の「仕事」や「労働」、「失業」や「無業」に対する意識の変換、すなわち「ハビトゥス」の変成であるとする。

これらの先行研究は、本稿の分析に有効な示唆を与えてくれるものであるが、いずれも移動を促したプッシュ要因の分析に重点がおかれ、台湾の視点からの考察、つまり、そのプル要因についてはあまり詳細に触れられていない。しかしながら、八重山の人々は台湾での就労や生活の経験から何を修得し、それが八重山の近代化にどのような影響をもたらしていくことになったのかを考察する際、八重山の人々の移動を促した植民地台湾のもつ時代状況を検討することは不可欠であると筆者は考える。また、いくら当時の台湾の日本人家庭で「女中」の需要が高まったとはいえ、なぜこれほど多くの女性が台湾に渡り、しかも終戦による引揚げまで台湾に残っていたケースが多かったのだろうか。以上の問題提起と先行研究の展開を受けて、本稿は、八重山から植民地台湾に渡った女性たちに焦点をあてて、彼女たちの移動を促進したプル要因を考察する。

3. 研究方法と調査の概要

本研究は、境界における社会空間を生きた八重山女性の植民地台湾への移動について、以下の二つの方法を通して行った。第一に、労働や人口移動に関する統計資料と、当時の石垣島と台湾で発行された新聞・雑誌などにおける言説の分析、第二に、1920～30年代に植民地台湾において出稼ぎ・移住経験を持つ当事者たちの手記における語りと、筆者による体験者への聞き取り調査によって記録された語りの分析である。

1) 調査の方法

筆者は、台湾経験者の移動動機と移動経験を分析する際、当初は当事者からの聞き取り調査の比重をもう少し高く設定していた。しかしながら、台湾経験者の平均年齢はもはや80歳以上で相当程度高齢化していることもあり、聞き取り調査対象者の選定は想像以上に困難を極めた。これらの事情から、インタビュー調査にあわせ、石垣市立図書館などが収集を進めている「台湾へ渡った八重山の人々～個人史にみる台湾での体験～」体験記録や自叙伝³⁾、沖縄竹富郷友会や与那国町老人クラブから発行されている記念誌に収集された

個人の生活史の記録等も補足資料として活用し、考察に反映させることにした。

体験者への聞き取り調査については、2005年5月と9月、2006年9月に、石垣島、竹富島、与那国島において、台湾への移動経験を持つ八重山女性11名に対し行った。聞き取り調査は半構造的インタビューにて実施した。聞き取り対象者の選定にあたっては、職業生活との関わりが感じられる人に重点を置いた。基本的にインフォーマントが話そうとしていることを妨げず、当事者が話したい話を促すことで、当事者の意味世界を把握することを心がけた。なぜなら、ライフ・ヒストリーの聞き取りとは、過去の出来事についての正確な情報を集めるというよりは、当事者が現在の時点から、過去をどのようなものとして再構成しているのかという点に焦点があるからである。

ここでライフ・ヒストリー法の抱える限界に関連して、留意しておかなければならない点がある。八重山女性のライフ・ヒストリーにおいて、台湾で生活する、台湾で仕事をするという動機は、いうまでもなく当事者ごとに、それぞれが異なる状況や個人的事情のもとで台湾に渡る決断をし、台湾においてもそれぞれに異なる環境で仕事を行なっている。したがって、台湾に渡った八重山女性たちのライフ・ヒストリーを均質的なものとして捉えるのでは、この経験のなかにある多元性を見落としてしまうことになる。また、ライフ・ヒストリー法に対する疑問点や課題として、定量的調査(quantitative research)と比べ、代表性や客観性の点で劣るとされることが少なくない。つまり、こうした多様な経験に関する語りであるライフ・ヒストリーを、普遍化・一般化することが可能であるのかという問いが常に投げかけられてきた。

しかし、八重山女性たちは、八重山から台湾に渡り仕事に就くというプロセスを通じて、ある種の経験を共有している。ここで重要なのは、彼女たちの経験の多元性・多様性に留意しながら、そのなかに見出すことのできる共通点があるとするなら、それはどのようなものであるのか、そしてさまざまな個人を取り巻く背景にもかかわらず共有されている経験は、どのような社会的背景や時代状況から生み出されているのかについて考察を進めていくことである。

2) 聞き取り調査対象者のプロフィール

聞き取り調査対象者のプロフィール(概要)については表1を参照されたい。聞き取り対象者は、主に八重山毎日新聞の新聞記者、与那国町教育委員会、琉球華僑総会八重山分会などを通じて機縁的に獲得した。聞き取り調査に応じた方々の年齢は、ほとんどが1920年前後に生まれていることから、いずれも現在80歳前後かそれを超えている。また、台湾に再度にわたり移住・出稼ぎを行なう者も少なくなく、聞き取り対象者のほとんどが終戦による台湾引揚げとともに帰郷している。

表1 台湾への移住・出稼ぎ経験者へのインタビュー調査対象者11人のプロフィール

| № | 生年 | 移動歴 | 台湾での経験・職業 | 帰郷後 | 在台期間 |
|---|------|-----------------------|--|--|------------------------|
| A | 1914 | 石垣→兵庫→石垣→台北→嘉義→岐阜→石垣 | 台北の大学教授宅で女中→嘉義の旅館で女中 | 石垣島で大手老舗のそば屋を経営。 | 1930-1945 |
| B | 1926 | 台北→京都→竹富 | 台北生まれの「湾生」、父は学校教師、12歳で小学校を卒業するまで台湾で生活。 | 京都の洋裁学校を経て、帰郷し主婦。 | 1926-1938 |
| C | 1924 | 竹富→台北→竹富 | 女中→病院での電話交換手→台湾鉄道ホテルで電話交換手 | 主婦(竹富島でレストランと喫茶店を経営) | 1937-1944 |
| D | 1915 | 与那国→高雄→与那国 | 高雄のホテルで女中→高雄州の知事宅で女中 | 主婦 | 1927-1947 |
| E | 1923 | 与那国→台北→与那国 | 歯科医宅で女中 | 主婦 | 1935-1937 1937-1946 |
| F | 1923 | 与那国→台北→与那国→澎湖島→疎開→与那国 | 姉が看護婦長を務める内科医院での見習い看護婦の傍ら台北州医学学会附属看護講習所→看護婦 ※従軍看護婦として大陸やシンガポールにも渡る | 島の公衆衛生看護婦として、地域医療への先駆的貢献者。沖縄県より表彰を受ける。 | 1941-1944 1944-1945 |
| G | 1923 | 与那国→台北→高雄→与那国 | 同級生の紹介により、台北市中心部の造花部で女中→美容師養成学校→高雄の美容院で修業 | 与那国における美容院開業第1号(電気パーマを普及させる) | 1938-1946 |
| H | 1922 | 石垣→那覇→台北→石垣 | 看護学校→国立大学附属病院での看護婦 | 近所に幼稚園を設立。地域の民生やボランティア医療に貢献し、表彰される。 | 1941-1945 |
| I | 1923 | 基隆→台北→基隆→石垣 | 父が台湾の鉄道部に勤務、基隆生まれの「湾生」、S17(1942)女学校卒 | 石垣島で小学校教師 | 1923-1946 |
| J | 1925 | 竹富→台中→台北→石垣 | 女中→蒋介石公会堂のレストランの女給→洋菓子店店員 | 竹富で旅館とそば屋を経営 | 1940-1946 |
| K | 1923 | 石垣→高雄→石垣→高雄→石垣 | 1回目 バスガイド 2回目 郵便局の窓口(2年)→畜産会社の電話交換手 | 主婦 | 1940-1941 1944-1946 |

このほか、インタビュー調査という形で正式に聞き取りを行なったわけではないが、筆者が現地滞在中、自らの父や母、あるいは祖父・祖母が台湾引揚者であるという方々からも多く話を聞くことができ、考察を肉付けしたり、時代背景を読み取っていく際に大いに参考になった。聞き取り調査の時間は一人あたり平均 1.5~2 時間程度であり、長い人は半日以上にも及んだ。中には複数回聞き取りを行なった対象者もいる。また、本研究にあたり、八重山から植民地台湾への人口移動に関して全般的な状況を把握するために、元高等学校校長、行政機関の郷土史編纂委員会関係部門の職員、地元の女性史研究者などにも話をうかがっている。

Ⅱ. 八重山から植民地台湾への人の移動の概要と特徴

まず、移動を促したプル要因について考察する前に、八重山から植民地台湾への人の移動について、統計データからその特徴を明らかにしていきたい。

1. 植民地台湾における沖縄出身者の人口動態と就労構造

沖縄県が台湾の植民地統治に関して重要な役割を果たしたことは、又吉（1990）をはじめとする先行研究が明らかにしている。又吉（1990）によると、台湾が日本に領有（1895）された翌年から沖縄出身者が商売目的で台湾を訪れていたが、沖縄からの移住者が増えるのは1920年頃からのことである。

台湾総督府による1935年の国勢調査では、在台日本人のうち、1920年の段階では沖縄県出身者は10位だったが、1930年には4位、1940年には1位となっており、1915年から1940年の間に約9倍に伸びている。このなかで、八重山出身者の占める割合は、1935年の在台沖縄出身者のうち約1,200人、全体の37%を占めていた（又吉1990: 47-48）。これは、当時の八重山の人口が沖縄県全体の約6%であったことからすると、いかに多くの渡台者を出していたのかがうかがえるものである。沖縄県外地引揚者協会「昭和32年引揚者給付金等支給法に基づく受給者数」によると、敗戦による台湾からの引揚者25,627人の25%にあたる6,491人が八重山出身者となっている（又吉2000: 2）。

また、移住者に占める女性の割合が増え続けていることに着目したい。女性の占める割合は、1919年には29.3%であったのが、1922年には45.2%にまで増加している。『沖縄県史 第7巻—移民』の資料では、八重山出身者の台湾居留者のうち、女性は59.6%を占めている。台湾総督官房臨時国勢調査部1930（昭和5）年『国政調査結果中間報』（台北州台北市）によると、「内地人ノ本籍及職業（中分類）別人口」総数67,687人（男35,916人、女31,771人）のうち、沖縄県は2,027人（男951人、女1,121人）となっており、男性に比べ女性の比率の高さが目立つのは全国で唯一沖縄県だけである。また、植民地台湾における沖縄出身者の職業をみると、男性は交通業、水産業で多く、女性は家事使用人や商業などが全国平均より高くなっていることがわかる（表2）。

2. 植民地台湾での八重山出身者の職業

沖縄県出身者のうち、八重山出身者の台湾における職業の状況はどうであろうか。辻（1985）によると、八重山諸島のなかでも、とくに多くの住民を台湾に送出した竹富島では、1919年に最初の台湾「出稼ぎ」者が送り出されたと伝えられている。八重山出身者の台湾における職業を明らかにするような資料は乏しいが、『先島朝日新聞』（1931年6月28日）には、見出しを「本郡女性の台湾進出女中奉公が断然リード」として八重山女性の台湾での職種が紹介されている。それによると、「本郡女性が台湾に出稼ぎに行っている

表2 1930（昭和5）年の台湾における沖縄出身者の就労構造

上段：人数（人） 下段：比率（%）

| | 全国男 | 沖縄男 | 全国女 | 沖縄女 | 全国 | 沖縄 |
|-------|------------------|----------------|------------------|----------------|------------------|----------------|
| 公務・自由 | 34,511 27.7 | 615 15.7 | 3,108 3.0 | 135 3.8 | 37,619 16.5 | 750 10.1 |
| 商業 | 11,043 8.9 | 293 7.5 | 7,092 6.8 | 274 7.8 | 18,135 7.9 | 567 7.6 |
| 工業 | 13,796 11.0 | 399 10.1 | 988 1.0 | 27 0.8 | 14,784 6.5 | 426 5.7 |
| 交通業 | 8,360 6.7 | 536 13.6 | 703 0.7 | 56 1.6 | 9,063 4.0 | 592 8.0 |
| 農業 | 3,474 2.8 | 107 2.7 | 975 0.9 | 17 0.5 | 4,449 1.9 | 124 1.7 |
| 水産業 | 1,617 1.3 | 382 9.7 | 3 0.0 | 1 0.0 | 1,620 0.7 | 383 5.1 |
| 家事使用人 | 32 0.0 | 5 0.1 | 1,514 1.5 | 410 11.7 | 1,546 0.7 | 415 5.6 |
| 鉱業 | 411 0.3 | 8 0.2 | 7 0.0 | 0 0.0 | 418 0.2 | 8 0.1 |
| 他有業者 | 2,600 2.1 | 158 4.0 | 320 0.3 | 16 0.5 | 2,920 1.3 | 174 2.3 |
| 無業 | 48,900 39.2 | 1,432 36.4 | 88,827 85.8 | 2,571 73.3 | 137,727 60.3 | 4,003 53.8 |
| 合計 | 124,744 100.0 | 3,935 100.0 | 103,537 100.0 | 3,507 100.0 | 228,281 100.0 | 7,442 100.0 |

台湾総督府編（2000）『外地国勢調査報告 第五輯：台湾総督府国勢調査報告』復刻版文生書院のデータをもとに作成。

原書は台湾総督府官房臨時国勢調査部『国勢調査報』。

者は843名」にのぼっており、その職業別、都市別、出身町村別は次のとおりである。職業別では、普通下女⁴⁾ 518人、旅館女中94人、奉職52人、料理屋・飲食店雇人41人、就学中23人、芸妓娼妓22人、その他93人となっており、約6割が家事使用人（「女中」として働いていることがわかる。また、都市別では、台北469人、基隆252人、台南47人、台中30人、高雄27人、新竹5人、花蓮港4人、蘇澳3人、恒春2人、宜蘭1人、屏東1人、嘉義1人、北投1人となっており、台北と基隆が大半を占めている。出身町村別では、石垣327人、竹富280人、与那国176人、大浜60人となっている。また、表3をみると、主な出稼ぎ先が台湾となっている職業は商業、農業、水産業、戸内使用人、雑業となっており、とくに戸内使用人の主な出稼ぎ出身地は八重山となっていることから、ここからも台湾での家事使用人は八重山出身女性が主であったことがうかがえる。

3. 植民地台湾における職業構成の変化と「女中」の需要の増加

植民地期台湾における日本人商工業者の存在形態の分析において、波形（2004）は、1930

表3 職業別出稼状況調査表 1932(昭和7)年

単位：人

| 業種 | | 男 | 女 | 計 | 主な出稼ぎ 府県名 | 主な出稼ぎ 出身地名 |
|-----------|---------------------------------------|-------|-------|--------|-------------------------|-------------------|
| 工業 | 製糸, 紡績, 酒造, 豆腐, 寒天, 製造, 其他工業 | 3,350 | 5,012 | 8,362 | 和歌山, 大阪, 愛 知, 滋賀, 東京 | 島尻, 中頭, 国頭, 那覇 |
| 鉱業 | 炭坑, 其他鉱 山 | 183 | 38 | 221 | 福岡, 大阪 | 島尻, 中頭 |
| 土木 建築業 | 大工, 石工, 土方, 日傭, 其他土木建築 業 | 807 | 80 | 887 | 大阪, 神奈川, 東 京 | 国頭, 島尻 |
| 商業 | 売薬, 各種行 商, 其他商業 | 446 | 261 | 707 | 鹿児島, 東京, 大 阪, 台湾 | 那覇, 島尻, 中頭 |
| 農業 | 養蚕, 茶摘, 農耕, 牧畜, 其他 | 590 | 250 | 840 | 南洋, 台湾, 宮崎 | 中頭, 国頭 |
| 林業 | 製炭, 其他林 業 | 12 | — | 12 | 愛知 | 中頭 |
| 水産業 | 漁撈, 其他 | 977 | 54 | 1,031 | 台湾, 南洋, 鹿児 島 | 島尻(糸満), 宮古 島 |
| 戸内 使用人 | 戸内使用人 | 1,239 | 1,431 | 2,670 | 台湾, 大阪, 東京, 和歌山 | 八重山 |
| 雑業 | 仲士, 雑役 夫, 其他雑業 | 1,619 | 763 | 2,382 | 台湾, 大阪, 東京 | 島尻, 中頭, 国頭 |
| 計 | | 9,243 | 7,889 | 17,132 | | |

沖縄県編 1934(昭和9)年『沖縄県社会事業要覧』より筆者作成。

年前後の台湾における日本人の職業構成が官公吏・商工業者(会社員を含む)・雑業者(芸娼妓・酌婦, 苦力を含む)の三者でほぼ三分しあうという特異な傾向を示した事に注意を促し, 移動性の高い零細商工業者・雑業者が職業構成の大きな割合を占めたことが人口移動に大きく作用する要因になったことを指摘している。台北市公共職業安定所における職業別求人取り扱い数(表5)でも, 求人・求職ともに商業が最も多く, ついで雑業となっている。

人口を職業構造からみると, 日本植民統治初期の台湾の職業人口は, 終始農業を主体としており, 1905年には71%を占め, 1940年には65%に減少し, 比率は次第に下がっていった。反対に, 商業, 工業人口は1920年代から徐々に増加の勢いを見せはじめ, 1940年には商業人口は10%, 工業人口は9%を占めていた。このほか, 公務員及び自由業は日本人を主としていたが, 1940年には5%に増加した(呉2005)。ここから, 1920年代以降の

台湾社会は、農業社会から近代商工業社会へと転換しつつあったことがうかがえる。

一方、この頃の日本内地の都市自治体では、都市自治体が主要な事業主体となった方面委員制度、職業紹介所、公共住宅など、さまざまな社会事業の制度や施設が導入された。それらは1920年代から1930年代にかけて植民地へも導入され、1922年に台北市職業安定所が設立された（大友・沈 2001: 75-76; 水田 2003:36）。台北市職業紹介所編『昭和10年3月 職業紹介所事業概要』によると、求職者全体3,940人中、沖縄県出身者が男性151名・女性1,099名であり、圧倒的に女性の求職者が多いことに注目できる（表4）。一般的に男性の求職者数が女性を大きく上回る地域が多いなか、沖縄県のみ求職者の9割近くが女性であったことは、きわめて特徴的である。

表4 台北市職業紹介所における出身地別求職者数（1933年）
単位：人

| | 男 | 女 | 計 |
|------|-------|-------|-------|
| 沖縄県 | 151 | 1,099 | 1,250 |
| 台北州 | 534 | 34 | 568 |
| 新竹州 | 215 | 4 | 219 |
| 鹿児島県 | 134 | 72 | 206 |
| 熊本県 | 161 | 28 | 189 |
| 福岡県 | 94 | 26 | 120 |
| 東京府 | 69 | 15 | 84 |
| 長崎県 | 52 | 23 | 75 |
| 佐賀県 | 59 | 13 | 72 |
| 広島県 | 41 | 28 | 69 |
| その他 | 832 | 256 | 1,088 |
| 計 | 2,342 | 1,598 | 3,940 |

『昭和十年三月職業紹介所事業概要』29-30頁（大友昌子・沈潔編 2001『戦前・戦中期アジア研究資料2 植民地社会事業関係資料集〔台湾編〕34 経済保護事業—職業紹介と労働事情』近現代資料刊行会所収）より作成。

表5 台北市公共職業安定所における職業別求人取り扱い数

| | 求人（男） | 求人（女） | 求職（男） | 求職（女） |
|-------|-------|-------|-------|-------|
| 商業 | 62% | 7% | 67% | 9% |
| 家事使用人 | 6% | 67% | 4% | 51% |
| 書記的職業 | 8% | 8% | 8% | 13% |
| 官公吏 | 5% | 4% | 4% | 6% |
| 雑業 | 11% | 11% | 11% | 13% |
| その他 | 8% | 3% | 6% | 8% |

台湾社会事業協会編（1941）『社会事業の友』第157号，26頁より作成。

Ⅲ. 八重山女性の移動を促した植民地台湾のプル要因

ここでは、主に当事者の移動動機と移動経験に関する生活史から、八重山の人々の移動を促した植民地台湾のプル要因について、共通する要因を取り上げ検証していきたい。

台湾への移動を促したプル要因として共通して最も多く聞かれるのは、「労働や就学の機会が多くあった」「都会へのあこがれ」「華の台湾」という語りである。これらの動機は、新聞記事や戦後に書かれた手記などからもうかがえる。こうした語りから、八重山から台湾への人の移動が増えた 1920 年代以降は、近代的な都市空間が台北に出現していたことが看取できる。

一方、八重山の人々の語りにおいて印象的なのは、「私の母は若い頃台湾に住んでいたことを今でも自慢げに語るのよ」という語りが随所で聞かれることである。筆者が与那国島で聞き取りを行なった際、台北の内地人の歯科医宅で「女中」として働いた経験を持つという女性 (E) は、「台湾帰りといったら、もう自慢だった。“台湾下がり”の女の子は、料理も歌唱も上手になって、頭もよくなって帰ってくる。ずっと与那国にいる人より、教育程度も上だった。まず、標準語がぺらぺら」⁵⁾と語っていた。当時の八重山では、とくに女性が台湾に行くことは一種のステイタス、「階層の上昇」に近いものがあったことがうかがえる。その理由はなぜなのか。ここで、1914 年石垣島生まれで、1931 年に渡台した大濱永丞の手記をみてみたい。

「島では金儲けになる仕事は少なかったので台湾へ働きに出る人が多かった。その頃、地元の人には琉装であったが台湾帰りは洋装でパリッとしていた。顔見知りでもなんとも感じなかった娘でさえ台湾から帰ってくると、ハイカラでどことなく垢抜けしていて人目を引いた (大濱 1992: 27)」

また、1924 年竹富島生まれの大山正夫の著書『昭和の竹富』(1985) には、次のように、文明開化の洗練を受けた女性たちに感化され、渡台する女性たちが多かったことが記されている。

「出稼ぎに行った島の娘たちは、二、三年にして一度は島に帰ってきた。色は白くきれいな言葉遣いに島の青年たちは喜んだ。渡台前は道で会っても話をしない、遠慮して逃げていった色の黒い娘が美女となって現れ小学校時代の懐かしい思い出話、それに台湾の話になると三線道路、アスファルト、ネオンサイン…の聞いたことのない言葉が次々と聞かされ楽しく夜の更けるのを知らない。文明開化の洗練をまともに受けた島の青年たちは驚嘆する、そして心惹かれていく。この二、三年で十年の遅れを感じた島の娘たちは格差に悩み台湾行きを一人で決める (大

山 1985: 109)」

これらの語りの背景にある植民地台湾側のプル要因として、筆者は、八重山女性の台湾での生活史の語りの分析から、以下の四点を抽出した。それらは、第一に、植民地台湾における「女中」をめぐる社会事業の展開、第二に、多種多様な職業教育機関の発達、第三に、「モダンガール」の登場に代表されるような、植民地台湾におけるモダニティの形成と都市文化の発達、そして第四に、それらを基盤に発展した女性の職域の拡大である。以下、それぞれについて、歴史的な統計資料や新聞雑誌における言説等も活用しながらその背景となる裏付けを具体的にみていきたい。

1. 植民地台湾における「女中」をめぐる社会事業の展開と八重山女性

まず、渡台当初、多くの八重山女性が就いた「女中」という職業の植民地台湾における展開状況はどのようなものであったのか。これについては、すでに浦崎(1994)や水田(2003)の論考が存在するため、本稿では、それらがあまり触れてこなかった点を中心に、後の議論につなげていく際に重要と思われる部分についてのみ言及する。

八重山出身「女中」たちの状況をうかがえるものとして、台湾社会事業協会『社会事業の友』83号(1935年10月号)に「沖縄出身の女中について」というコラムが掲載されている。まず、そこにおける言説をみてみたい。

「現在台北市職業紹介所に於ける婦人の就職率は100%といふ成績であるが、この中90%余を女中が占め、その女中志願者の85%は沖縄地方出身の女だといふ。…石垣、八重山の故郷を離れて浪路遥かに南島を志す十六の娘の胸には、来るべきあらゆる困難に耐えて、あくまで女中で身を立ててゆこうとする心の用意が出来ている。…沖縄女は大がい十六、七歳から二十歳前後まで、石垣、八重山方面から一船毎に渡って来る。現在台北市約五千人の女中の中四千余人が沖縄女…給料は来たばかりのもので十六、七歳が八圓、二十歳前後で十圓、六箇月も立てば十二圓、一人前になれば十五圓といふ相場である。内地が十圓といふ相場、台湾の女中の給料は内地に比べると高い(1935: 74-76)。」

八重山出身「女中」の雇い先である台湾の日本人社会は、台湾総督府を頂点に棒給の6割以上の外地手当を受ける総督府高官、裁判官、大学教職員、各校長、軍人、その他の公務員など、民間では商社員などが「女中」を雇える階層を構成していた(浦崎 2000)。内地では、「女中」は約8割が縁故による就職が主であった(清水 2004: 143, 153)。しかし、植民地の日本人社会は血縁の薄い核家族社会で転勤の多い社会であったため、「女中」を

雇う場合、公共の職業安定所や新聞の求人欄が大いに役立った。給料や労働環境は雇い主に幅があったが、内地で2,3円の付き手当で働く「女中」仕事は、台湾ではそれよりもよい待遇を得ることができるケースも多かったのである(竹中2001:91)。

1) 「女中」をめぐる社会事業の展開

一方、両大戦間期において、「女中」を対象とした社会事業の強化は植民地にも導入された。当時の台湾では、「女中」を育成するために講習会も開かれていた(竹中2001:299)。

『台湾日日新報』(1935年2月23日)の記事によれば、講習会は「国語を話せる人」を対象に、礼儀作法、女中実践道徳、掃除、来客の応対から市場での買い物の仕方、靴の磨き方、按摩まで教えられるという内容のものであった。近代日本の「女中」はもともと、雇い主との関係が対等な労働サービスの売買関係ではなく、行儀見習いや家事習得など、「修業」としての性格を有していた。つまり、働く者を人格も含めて身包み抱え込む主従関係として位置付けられていた(清水2004:109)。筆者の与那国島出身のインフォーマント(E)は、下記のように台湾での「女中」奉公の経験を次のように誇らしげに語る。

「市場にはいろいろな野菜や果物があって、買い物を頼まれても分からなかった。カレーライス、ハヤシライス、オムライスといった洋食や中華料理は台湾に行ってから初めて知りましたし、洋菓子の作り方などいろいろ珍しい料理を習いました。台湾で女中奉公したので、家政女学校生と同等の社会性と教養を身に付けることができたと思います。」⁶⁾

当時の八重山女性の間で最も多く行なわれた台湾への「女中」奉公は、内地の上流家庭で標準語を覚え、日本料理の作り方や日本式の礼儀作法の修得にもつながったという意味において、八重山女性の「内地化」という側面ももたらしたものと思われる。八重山では、沖縄本島のように日本本土から女工募集人が来るわけでもなく、家業の農業以外の職に就ける可能性も少なく、1937年に八重山に女学校ができるまで、向学心はあっても高い教育を受けられるのは安定して高い現金収入を得ている家の子どもたちに限られていた。また、当時、八重山では農業を主体とした産業構造であった。一般的に言って、農家の場合、子どもを早く働きに出す傾向もあるため、当時の八重山では、「沖縄(那覇)の女学校に行かせるより、台湾に働きに出した方が、実家への仕送りができるばかりでなく、行儀作法が身に付くし何かと有利」という雰囲気があった。そのため、「女中」奉公は比較的「割のよい」仕事であったと考えられる。当時の八重山女性にとって、上流社会での「女中」奉公はいろいろな面で生きた社会学校でもあったことがわかる。

2) 八重山出身「女中」たちの生活圏

このように、「女中」奉公の経験は内地的な規範の修得につながったことがうかがえるが、それでは、「女中」として台湾に渡った八重山女性たちの生活圏は日本人社会のみに限定されていたのだろうか。その様子をうかがい知る手がかりになると思われる記述が、『台湾婦人界』1936(昭和11)年4月号の「台北の婦人と消費市場」欄に記述されている。ここでは、ある男性が台北市のAとBの2つの市場にて女性たちを観察し、そこに入出入りする女性の服装、スタイル、その言行等に目を注ぎ、女性たちを①給料生活者らしき女性、②商家の主婦らしき女性、③奉公人「女中」らしき女性の3つに分類している。A市場の勢力範囲に居住しているのは内地人が最も多い(約2万人)。それに対し、B市場の方は本島人が最も多く、内地人は約8千人である。A市場で目にするのは商家の主婦らしき女性が最も多く(111人)、次いで給料生活者らしき女性(58人)であり、奉公人「女中」らしき女性は17人である。一方、B市場の方は商家の主婦らしき女性が22人で、次いで奉公人「女中」らしき女性が17人、給料生活者らしき女性16人となっている。

ここから、「女中」が多いとされる八重山女性たちの生活圏は、決して日本人社会だけに限定されていたわけではないことが推察できる。筆者のインフォーマント(E)の「市場にはいろいろな野菜や果物があって、買い物を頼まれても分からなかった」⁷⁾という語りからうかがえるように、個人差はあったとしても、日常生活を通じて台湾人との関わりも少なかったわけではなかったことがいえるだろう。

2. 職業教育機関の増加と社会事業の発達

他方、植民地台湾では、1919年1月の台湾教育令、1922年の改正台湾教育令に基づいて近代的な教育制度の基盤が整っていくようになった。それ以降、内地人と台湾人の就学上の差別はあったものの、台湾における教育人口は増えていった。職業教育機関に関しては、最初、本島人を対象としたものが設けられたが、1916(大正6)年に内地人を対象とした商業学校、1917(大正7)年に工業学校がともに台北に設置された。こうした趨勢のなかで、中学校、高等女学校といった限られた階層の人たちが進学する学校以外にも、実業学校や実業補修学校といった職業教育機関も増えていった。実業学校は1935年の6校から1940年には18校、実業補修学校は1935年の39校から1940年は73校と5年間の間に急増している(小林2002b:209-210)。また、1940(昭和15)年4月末現在の実業補修学校の生徒数において、内地人女子は「家政」が高くなっているのが目立つ。

社会事業についても、1921年8月、総督府によって、各州に対して社会事業体制の刷新と拡充を進めるために依頼通達が出され、翌1922年度には、はじめて国費による社会事業費が計上され、体制の確立が図られた(永岡2001:12)。こうして社会事業行政機構の整備が進められていくなかで、女子の教育機関についても、単に初等普通教育や高等普通

表6 実業学校数 (1942年4月末現在)

| 種別 | 学校数 | 学級数 | 職員数 | 生徒数 | | | |
|------|-----|-----|-----|-------|-------|------|--------|
| | | | | 内地人 | 本島人 | 高砂族他 | 計 |
| 農業学校 | 7 | 72 | 148 | 842 | 2,539 | 21 | 3,402 |
| 工業学校 | 5 | 84 | 203 | 1,705 | 1,315 | 10 | 3,030 |
| 私立 | 1 | 6 | 21 | 31 | 311 | 2 | 344 |
| 商業学校 | 7 | 78 | 171 | 1,155 | 1,720 | 7 | 3,882 |
| 私立 | 1 | 12 | 30 | 18 | 659 | 11 | 688 |
| 計 | 21 | 252 | 573 | 4,751 | 6,544 | 51 | 11,346 |

小林英夫監修 (2002a) 『日本人の海外活動に関する歴史的調査』第六巻台湾篇 1, ゆまに書房, 209頁。

表7 実業補習学校数 (1942年4月末現在)

| 種別 | 学校数 | 学級数 | 職員数 | 生徒数 | | | |
|------|-----|-----|-----|---------------|-----------------|----------|-----------------|
| | | | | 内地人 | 本島人 | 高砂族他 | 計 |
| 農業 | 39 | 90 | 153 | 3 | 4,015 女103 | | 4,018 女103 |
| 工業 | 3 | 21 | 30 | 39 | 641 | | 680 |
| 私立 | 1 | 3 | 10 | 5 | 115 | | 120 |
| 商業学校 | 5 | 19 | 30 | 15 | 1,059 | 1 | 1,075 |
| 私立 | 3 | 12 | 24 | 18 | 723 | 10 | 751 |
| 商工 | 2 | 24 | 43 | 319 | 585 | 4 | 908 |
| 水産 | 1 | 3 | 6 | | 95 | | 95 |
| 家政 | 26 | 106 | 201 | 女1,793 | 女3,554 | 6 | 女5,353 |
| 私立 | 1 | 9 | 13 | 女2 | 女467 | | 女469 |
| その他 | 3 | 12 | 17 | 女7 | 261 女150 | | 261 女157 |
| 計 | 84 | 299 | 527 | 399 女1,802 | 7,494 女4,274 | 15 女6 | 7,908 女6,082 |

小林英夫監修 (2002a) 『日本人の海外活動に関する歴史的調査』第六巻台湾篇 1, ゆまに書房, 210頁。

教育だけでなく、さまざまな職業教育から専門教育にまで及ぶようになった。高等女学校といった一部の限られた女子のみに進学チャンスが限られていた学校以外に、女子職業学校、愛国婦人会台湾支部による女子夜間講習会など、働きながら通学できる学校も整備されつつあった。たとえば、台北女子職業学校は、入学資格者は小公学校卒業以上の者で、教科目は国語算術科、和服裁縫科、洋服裁縫科、手芸科などが設置され、八重山女性の間では、こうした職業教育機関に「女中」などの仕事の傍ら通学する者が少なくなかった。八重山に中等教育機関ができたのは、1937（昭和12）年創立の八重山農学校、1942（昭和17）年の八重山中学校及び女学校が最初である。そのため、台湾の中学、師範学校、医専、女学校といった限られたエリート層のみを対象とした教育機関への進学だけではなく、男性は店員見習い、女性は「女中」などの傍ら、夜間学校・職業学校などへ入学する者も

増えていくことになった。これら八重山出身者の台湾での教育の経験は、やがて「文化資本」ともなり、八重山の近代化へも貢献することになっていったのである。

3. 植民地台湾におけるモダニティの形成と都市文化の発達

このような教育機関の発達などを背景に、1920年代から30年代にかけて、植民地台湾でも東京や上海などとほぼ同時期に「大衆」が現れ、大衆消費社会の原型が植民地台湾に成立した。30年代に最盛期を迎えるモダン生活の担い手は、大正期中流階級よりさらに幅を広げた都市中間層に、工員、店員などのブルーカラー層や、旧中間層にあたる商・工の自営業者なども巻き込み、この時期に急増した職業婦人層も加わっていた。この頃の『台湾婦人界』や『台湾実業界』といった雑誌や新聞記事には、「台湾の地に足を一步踏み入れたとき、まず目に付くのは、断髪、洋装、耳飾、腕飾、軽快な歩行振りといったモダンな女性の姿」であるというような、近代的な職業婦人や女性の職場進出に関する言説も増えてくる。こうして都市文化も形成され、「モガ現象」に象徴されるような「モダンガール」も誕生した。

後述するように、1930年代に入ると、植民地台湾でも、それまでの家事使用人、女工などとは異なる女性の職域が拡大していく。女性車掌や女子事務員、女性電話交換手、女性店員からカフェの女給といった分野に女性の職業が台北を中心とする大都市の中で拡大し、街頭を歩く洋装の女性たちも目立った現象となり始めていた。当時の台湾の大手百貨店で、内地人も多く利用し、筆者のインフォーマントの多くの語りの中にも登場した「菊元」デパートの三浦正夫店長は、『台湾婦人界』(1933年10月号)に、「むづかしい百貨店経営一進んだ台湾女性」として次のようなコラムを記述している。

「デパートから見た台湾の女性？断定的なことは云えませんが、唯だ私たちに感じさせられることは、内地より一步進んでいるのではないかと思います。お化粧のごときもです。台湾の女性は一步進めて、個性を生かしただけでは物足りない。欠陥を補い、フレッシュな感触と明朗な色彩を興へるとでも云ひませうか兎に角『自分を作る』といふ様に進化してきたと思われます。呉服もの、洋品類化粧品等の買行から見てさうした感に打たれております。要するに『自分を作る』ことに積極的ではないでせうか？・・・」

植民地台湾における「大衆」の特徴は、世界で同時代的に発生するさまざまな「近代」を選択的に消費することであった(李 2005)。この時代には、植民地台湾において、東京経由の近代日本の消費文化以外にも、上海を経由した近代中国の消費文化も入り込み、これらが多様な層によって台湾発の大衆消費文化に翻案され、台湾独自のモダニティのスタ

イルが形成されていった。前述の与那国島出身女性（E）の「当時、台湾ではハイカラなお嬢さんたちは、みなハイヒールをはいてパーマをくるくる巻いていたのよ。もちろん、私もそれを台湾へ行ってはじめて覚えました」⁸⁾ という語りからも、そうした当時の植民地台湾の女性たちの風景が伝わってくる。さらに、上述の観察と重なる言説として、筆者が八重山でよく耳にするものに次のようなものがある。

「台湾に行った島の女の子たちが2～3年に一度戻ってくるでしょ。そのとき、島の男の子たちが離島棧橋のところで女の子たちが船から降りてくる姿を拍手もんで出迎えていたのよ。だって、みんな色が白くなって、きれいにお化粧して、ワンピースを着て、カラフルなパラソルをさして船から次々と下りてくるんですもの」⁹⁾

こうした語りからは、モダニティの洗礼を受けた八重山女性たちは、同郷の男性の目を楽しませる、男性のまなざしの対象として好まれたことを物語っている。そうした植民地台湾の近代性が持っていた物質的・文化的な要素も、女性たちの台湾へのあこがれを助長させたのではないかと思われる。



写真1：台北の大手菓子店「一六軒」で店員として働く与那国の人々と仲間たち（1941年）

出典：与那国町史編纂委員会事務局編（1997）記録写真集『与那国 沈黙の怒涛』より。

IV. 女性の職域の拡大と八重山女性における職業意識の芽生え

このような植民地台湾の時代状況のなかで、八重山女性たちは、台湾での職業生活や台湾での生活経験からどのような精神を培っていったのであろうか。

1. 八重山女性における職業意識の誕生と職業移動

松田(2006)も指摘しているように、彼女たちの生活史からは、「貧困からの脱出」というよりは「将来のための投資」という未来志向的性格を持っていることがうかがえ、植民地近代的主体として、社会的上昇を果たそうとする積極的な意欲を持っていたことが看取できる。なぜなら、もちろん台湾で働くことをどれだけ戦略的に捉えているかは個人差があるとしても、多くの八重山女性たちにとって、植民地台湾は、資格や経験の獲得、転職によって社会的上昇を果たすことが可能な場所と捉えられていたからである。

表1からも明らかなように、多くの八重山女性が植民地台湾に渡った後、「女中」などの傍ら職業学校に通って技能を習得したり、より「条件のよい」「自己実現のできる」職を求めて、転職を経験している。また、八重山女性の多くが、終戦により引揚げるまで台湾に暮らし、概して在台歴が長い傾向にある。ここから、非専門職労働に従事した八重山女性の間で、台北に滞在している間に高い教育を受け、仕事を変えて社会的上昇を図ることが、台湾において一般的になっていたことが看取できる。たとえば、表1では、11人の女性うち6人が「女中」として台湾に渡った経験を持つが、そのうち5人が、「女中」の経験の傍ら美容師や洋裁の資格を取得したり、台湾では早くから開けた女性の職業のひとつである電話交換手などへ職を変えるなど、より条件のよい転職を果たしていることが明らかになった。

八重山のなかでも、とりわけ与那国には、台湾引揚者から地域社会の第一線を担う女性が多く輩出されている。たとえば、「女中」から台湾で専門の職業教育を受けることによって資格を取得し、社会的上昇を果たした著名な八重山女性のひとりに、与那国島で戦後初の女性町議となった玉城喜美代(1906年生まれ)がいる。玉城は、1929年に植民地台湾に渡り、台北市大正町で「女中」として台湾での生活をスタートさせ、「女中」の傍ら、自らお金を貯めて台北看護婦産婆講習所に入り助産婦の資格を取得した。1947年帰郷、戦火で変わり果てた島の様子に胸が締め付けられる思いをしたという。玉城は、八重山郡政府より産婆免許を交付され、同年9月故郷の与那国島久部良で産婆を開業した。また、戦火も落ち着き始めた同年10月、町役場の要請で久部良婦人会長を勤めた。1947年から1949年、町民に請われて初の女性町会議員となり、とくに母子保健や住民の衛生問題を取り上げた。1952年、島を出た後、石垣島で助産所を開業、その傍ら、保健所の行なう妊婦相談や母子学級、予防接種、乳幼児健診に協力し、地域の母子保健思想の普及に尽力した人物である。

戦後女性が参政権を持つようになったのは、沖縄本島が1945(昭和20)年9月、本土は1945(昭和20)12月である。沖縄の女性は米軍政府の政治部長モードック中佐の一声で本土より先に政治に参加することができたが、宮古・八重山においては、沖縄本島に4年遅れて1949(昭和24)年3月のことであった。当時、島では女性の政治参加に対する

関心は低く、選挙への意識の向上を図るのには困難な状況にあったが（大田 1985）、与那国では22人中3人の女性町会議員が当選した。しかも興味深いことは、当選した3人の女性（玉城喜美代、宮里キクノ、黒島キヨ）はいずれもみな台湾引揚者であったことである。

宮里キクノ（1911-1985）は、1926年に与那国尋常高等小学校高等科卒業後、単身で台湾に渡り、台北市の小野原乾物店に勤める。翌18歳のとき、日本ビクター台北支店長・宮里孝信と結婚。1男2女をもうける。1946年、一家で与那国に引揚げたが、翌年夫が病死したため、文具と雑貨店を始めて、生活を支えた。また、1916年生まれの黒島キヨは、12歳の時に台湾・高雄にいる姉に呼ばれ、高雄の小学校に転校。台湾から流入するヤミ米に本音を主張し、住民の暮らしを優先させた（琉球新報社編 1996）。

これらの女性たち以外にも、筆者のインフォーマント（G）は、台湾の高雄の美容院で修業し、美容師の免許を取得、引揚げ後の昭和21年10月、与那国で最初の美容院（パーマ屋）を開業、当時、島ではまだなかった電気パーマを普及させた。美容院の名前は師匠のもとでインターンをしていたときの美容院の名前をそのまま命名した。

当時の植民地台湾においては、沖縄出身者の多くは、「日本人」を頂点とする民族の階層構造のなかにおいて日本人の劣位に置かれ、ときには台湾人にも「下」にみられるなど、複雑な民族関係と、そこからくるアイデンティティの葛藤を経験していた（又吉 1990；野入 2006）。こうした沖縄出身者に対する差別から逃れようと、沖縄的な苗字を棄てて「ヤマト」的な名前に改めたり、本籍を日本本土の他府県に移したりする人も存在した。また、「皆が台湾に行っているから」「台湾に行く前は、ただ台湾へのあこがれだけが先行しており、台湾についての知識はほとんど持っていなかった」というように、友人や親族に誘発されるように行っている人も多いため、想像とは違ったと感じた人もいただろうし、失敗して帰郷する人も当然少なくはなかないただろう。したがって、台湾に渡った八重山出身者が決してみな肯定的な台湾経験を持っているわけではないことを看過してはならない。筆者の聞き取り調査でも、「琉球人と呼ばれて低く見られた」「第二の生蕃とよばれた」「内地人に『リーヤ』と呼ばれ、自分たちとは違うというような扱いを受けた」というように、被差別体験を持つインフォーマントも少なくなかった。ただし、着目したいのは、そのように語りつつも、若い頃一生懸命に生きた台湾での経験を懐かしいものとして、積極的に捉えているインフォーマントが少なくなかったことである。八重山女性たちは、なぜ台湾で一生懸命に生活を切り開いていこうとしたのか。

2. 女性の新しい職域の誕生と職業の多様化

その背景にあると考えられるのは、1930年代後半以降の台湾における女性の新しい職域の誕生と職業の多様化である。前述の台北市公共職業安定所の求人・求職状況をみると、

「女中」の求職者数と求職件数はともに1936年がピークであり、それ以降は減少傾向に転じていく。台北市社会事業協会「台北市職業紹介所に現れた時局下の種々相」には、次のように沖縄出身女性の職業に対する志向の変化が述べられている。

「1937(昭和12)年9月に日中戦争前までは女子の求職の大部分は「女中」希望者であり、とくに沖縄出身者が最も多く85%を占め市内の需要を満たしていたが、その後は女性の就職が多くなったため家庭に入って家事に就くことを喜ばぬようになった(柿原1941:27)」

また、女性の就職として、「家事の方面に希望するものが少なくなった代わりに、最近では技術方面に志すようになったためであるが、洋裁やタイプライターの講習を受けたいとか看護婦・産婆の免状を得たいとか珠算・簿記を修めたいというような、職業婦人として立つ準備に技術を習得し置く必要から志願しているものが多くなった。其たいていは学歴を持たないものであるが、タイピスト・看護婦・店員・電話交換手・事務員・給仕等の方面に女性の職業進出は年々増加の傾向を示している。その中とくに本島人女性の求職が著しくなった(柿原1941:28)」というように、台湾における女性の職業に対する志向にも変化が生じてきたことに注目できる。

これらの記述から、八重山女性の職業の志向が変化してきたこと、そして台湾において女性の職域が徐々に拡大してきたことがよみとれる。1920年から1930年にかけての台北州の台湾人女性の就業人口比率は、農業・漁業などの第一次産業が20.35%で最も多く、第二次産業が7.84%、第三次産業が12.51%である。台湾人女性は製茶、紡績などの女工が多かったが、1930年代には、とくに台北などの都市部においては、産婆、教師、看護婦、電話交換手、バスの車掌、郵便局の事務員などに進出する女性も増え(陳1999:88)、しかもこれは八重山女性が進出している職域と少なからず重複するようになってきていることが分かる。筆者が『台湾日日新聞』の求人広告欄「萬なかたち」に掲載された女性の求人傾向を1920年代と30年代について分析を行ったところ、時代を経るごとに「女中」から「旅館女中」・「女給」、そして「女店員」・「女事務員」や「看護婦見習」という方向に変化しており、筆者がインタビュー調査を行なった11人の八重山女性の職業移動歴をみても、そうした変化がほぼ読み取れる形となっている(表1)。

表8は1937(昭和12)年10月の台北市女性労働者の賃金調査である。この賃金表には約50種類ほどの職種が掲げられており、都市化や教育機関の発達とともに女性の職業が多様化してきていることが読みとれる。医師、産婆や教師といった専門技能を要する職業以外にも、芸者、女給、料亭仲居などといった娯楽や消費と関連した比較的収入の高い職業に就く女性も多くなっていき、また、植民地台湾におけるメディアの発達とともに、新

表8 台北の女性労働者の賃金 1937（昭和12）年10月

単位：円

| 職 種 | 最高月収 | 最低月収 | 職 種 | 最高月収 | 最低月収 |
|------------|------|------|---------|------|------|
| 新聞記者・保母・按摩 | 100 | 20 | ピアニスト | 100 | 10 |
| 官庁事務員 | 80 | 25 | 製茶工場 | 25 | 8 |
| 会社事務員・理髪師 | 90 | 20 | 土木人夫（女） | 35 | 15 |
| タイピスト | 70 | 28 | 農業人夫（女） | 30 | 18 |
| 官庁給仕 | 35 | 12 | 女 中 | 37 | 5 |
| 会社給仕 | 30 | 10 | 家 政 婦 | 120 | 20 |
| 喫茶ガール | 40 | 8 | 筆耕（作者） | 40 | 20 |
| 女給・芸姐 | 200 | 15 | 飲食物行商 | 40 | 15 |
| 小学校教員 | 150 | 35 | 古物行商 | 60 | 18 |
| 女学校教員 | 230 | 50 | 商 店 員 | 30 | 5 |
| 看 護 婦 | 150 | 10 | 養女的庸人 | 20 | 2 |
| 付 添 婦 | 90 | 30 | 洗 濯 婦 | 10 | 0.5 |
| 芸者・ダンサー | 300 | 20 | 劇場ガール | 30 | 8 |
| バス車掌 | 45 | 27 | 劇場お茶子 | 60 | 15 |
| デパート店員 | 50 | 12 | 娼 妓 | 200 | 21 |
| 商店事務員 | 50 | 20 | 料亭仲居 | 200 | 20 |
| アナウンサー | 70 | 30 | 茶道教師 | 150 | 30 |
| タバコ工場女工 | 40 | 12 | 裁 縫 業 | 120 | 10 |
| ミシン工場女工 | 35 | 9 | 天理教布教師 | 100 | 5 |
| 紙箱製造女工 | 20 | 7 | 巡礼行脚師 | 40 | 9 |
| 産 婆 | 250 | 5 | 保険外交員 | 90 | 10 |
| 声楽教師 | 140 | 15 | 自動車運転手 | 70 | 40 |

『台湾婦人界』第5巻第1号，1938（昭和13）年1月号，59頁より筆者作成。

聞記者，アナウンサー，作家などといった専門的な職域にも女性が進出していくようになっていった。

一方，こうした女性の職業の多様化は，八重山女性たちの生活圏にも変化をもたらしていくことになった。ここで筆者のインフォーマント（J）は，1925年竹富島に生まれ（在台期間1940-1946），渡台当初は「女中」として働いていた。しかし，途中で蒋介石公会堂内の食堂のウエイトレス（女給）に転職したことをきっかけに，台湾人の友人も増え，同じ「日本人」同士よりも，むしろ台湾人の方を近しく感じるようになっていったという。Jの事例は，女性の職域の拡大と多様化とともに，多くの台湾人女性も進出している職場と八重山女性が進出する職場が重複してくるようになり，彼女たちの生活圏も拡大していくようになったことを示すものでもある。

このようにみると，八重山の女性たちの中で「職業意識」が芽生えるようになったのは，植民地台湾で女性の職業が発達し，可動的な労働市場が形成されていったことが大きな背景のひとつにあるのではないかと思われる。そうしたことが，八重山女性の「女中」奉公

の動機や意識にも変化をもたらし、「花嫁修業」から「社会的上昇を果たすためのひとつのステップ」へというように、その位置付けをも変化させ、「ハビトゥス」の変成をもたらしていくことにもなったのではないかと思われる。

V. 結論

本稿では、八重山女性の移動を促進したプル要因として、移民社会が持つモビリティもあいまって形成された可動的な労働市場の存在と、働きながら学べるような多種多様な職業教育機関の発達、そして職業の多様化による女性の職域拡大が背景にあることを明らかにした。これら植民地台湾のもつモダニティの要素が、職業を通じた社会的上昇を果たすチャンスの多さの土壌を提供し、先行研究で指摘された八重山住民の「仕事」や「労働」、「失業」や「無業」に対する意識の変換、すなわち「ハビトゥス」の変成をもたらしていくもうひとつの要因ともなった。逆説的にいえば、八重山女性は台湾の植民地的近代を担う主体の一群をなしていたのではないかということができよう。

エリクソン (Eriksson 1973) もいうように、人間には青年期という社会の一成員として、ある役割をこなしていくために心の準備がなされる時期がある。つまり、それまで意識することのなかった自分のあり方に疑問を持ったり、不安になったりすることで新たな自分を獲得していく時期である。そうした個人のアイデンティティの形成において、職業は非常に大きな位置を占める。自分に付加価値をつけていくことが可能な、可動的な労働市場が形成されていた植民地台湾は、八重山女性にとって社会的アイデンティティ構築の場でもあったともいえる。

八重山では、台湾に渡った女性たちの多くは第二次世界大戦終結による終戦とともに引揚げとともに帰郷している。八重山女性たちは、植民地台湾において、内地的な生活規範、標準語などを習得する一方で、当時の台湾において、女性の職域の拡大とともに培われた職業意識やキャリア志向的な精神を獲得した。こうした八重山女性が植民地台湾で学び取った精神や文化は、帰郷後に家庭生活や職業生活、生活改善などを通じて、八重山の近代化、戦後初期の島の再建にも貢献していくことになるのである。

一方、本稿の考察から浮上した課題として、植民地台湾が持っていたモダニティの性質とはいかなるものであったのか、その特徴をより掘り下げて検討していくことが必要である。また、本稿では女性たちに焦点をあてたが、八重山からは、当然、男性たちも多く植民地台湾に渡っており、彼らももたらした功績も少なくはない。今後は、男性も含めた八重山の台湾体験者の存在が、八重山の近代化にいかなる影響をもたらしていくことになったのか、そのさらなる検討が課題となる。

謝辞

本研究は、「沖縄・八重山諸島から台湾への人の移動が八重山の〈空間〉と地域社会の形成に与えた影響：植民地台湾への女性の移動を中心として」（財団法人日本科学協会平成17年度笹川科学研究助成採択課題，課題番号17-053）によって行われた成果の一部です。聞き取り調査に応じてくださった方々，調査にご協力いただいた関係者の皆様に感謝申し上げます。

注

- 1) 「女中」など，これら女性の職業を表す言葉は現代では差別的な呼称ともされているが，歴史的な文脈が含まれているという意味で，本稿では括弧書きでそのまま記載している。
- 2) 台湾への人の移動が増える直前の1922年の八重山諸島全体の本籍人口25,145人，現住人口は30,839人，農業を職業とする人口とその被扶養人口を合計すると20,980人に上り，農業人口が多数を占めていた（沖縄県1925）。1920年代になると，沖縄県では，「ソテツ地獄」として知られる，とくに第一次世界大戦後の経済的困窮や製糖に偏向した農業形態が疲弊を招くなかで，沖縄県の他の農村地帯では，フィリピン，ハワイ，南米，そして大阪をはじめとする日本本土都市部への移民などが奨励された。
- 3) 石垣市立図書館が収集を進めている「台湾へ渡った八重山の人々～個人史にみる台湾での体験～」には，筆者が収集時点（2005年5月時点）で合計27名（男性20人，女性7人）の手記が収集されていた。
- 4) 「普通下女」とは，「女中」のことを指している。
- 5) 筆者の聞き取り調査による語り，2005年9月21日。
- 6) 筆者の聞き取り調査による語り，2005年9月21日。
- 7) 筆者の聞き取り調査による語り，2005年9月21日。
- 8) 筆者の聞き取り調査による語り，2005年9月21日。
- 9) 筆者の聞き取り調査による語り，2005年5月7日。

文献

- 石川友紀（1974）「海外移民の展開」（沖縄県編『沖縄県史 第7巻—移民』），207-420頁。
- 石原昌家（1996）「沖縄出稼者と定住—異文化接触と同化過程—」（谷 富夫編『ライフヒストリーを学ぶ人のために』世界思想社），31-61頁。
- 岩崎小虎（1936）「台北の婦人と消費市場」（『台湾婦人界』1936年4月号），44-47頁。

「1930年前後の八重山女性の植民地台湾への移動を促したプル要因」(金戸幸子)

浦崎成子(1994)「日本植民地下台湾における女子労働—台湾出稼ぎ女中をめぐる—」
『沖縄・八重山研究会会報』第37号), 1-2頁。

浦崎成子「植民地下台湾の女性労働」(『琉球新報』2000年8月12日)。

E・H・エリクソン著, 岩瀬庸理訳(1973)『アイデンティティ—青年と危機』金沢文庫。

太田静男(1985)『八重山戦後史』ひるぎ社。

大友昌子・沈 潔編(2001)『戦前・戦中期アジア研究資料2 植民地社会事業関係資料集
〔台湾編〕34 経済保護事業—職業紹介と労働事情』近現代資料刊行会。

大山正夫(1985)『昭和の竹富』自費出版。

大濱永丞(1992)『大濱永丞私史—八重山「濱の湯」の昭和』先島文化研究所。

沖縄県編(1925)『沖縄県統計書 大正十一年 第1・2編』。

沖縄県編(1934)『沖縄県社会事業要覧』。

沖縄竹富郷友会創立50周年記念期成会記念誌部会編(2000)『創立50周年記念誌 竹富』
沖縄竹富郷友会。

財団法人沖縄県文化振興会公文書管理部史料編集室編(2000)『沖縄と台湾』沖縄県史ビ
ジュアル版6近代①, 沖縄県教育委員会。

柿原 勤(1941)「台北市職業紹介所に現れた時局下の種々相」(台湾社会事業協会編『社
会事業の友』第157号), 24-28頁。

金城 功(1974)「移民の社会的背景」(沖縄県編『沖縄県史 第7巻—移民』), 87-204
頁。

呉 文星「近代台湾の社会変遷」2005年12月21日,

<http://www.f.waseda.jp/ksunaoka/class/taiwankouza/wuwenxingriwen.htm> よりダウ
ンロード。

小林英夫監修(2002a)『日本人の海外活動に関する歴史的調査』第六巻台湾篇1, ゆまに
書房。

小林英夫監修(2002b)『日本人の海外活動に関する歴史的調査』第八巻—2, 台湾篇3—2,
ゆまに書房。

小森陽一ほか編(2002)『岩波講座 近代日本の文化史6 拡大するモダニティ 1920-30
年代2』岩波書店。

『先島朝日新聞』1931年6月28日付, 「本郡女性の台湾進出女中奉公が断然リード」。

清水美知子(2004)『<女中>イメージの家庭文化史』世界思想社。

台湾社会事業協会編(1935)「沖縄出身の女中について」(『社会事業の友』83号, 1935年
10月号), 74-76頁。

台湾総督官房臨時国勢調査部(1930)『昭和5年国政調査結果中間報(台北州台北市)』。

台湾総督府官房臨時国勢調査部(2000)『外地国勢調査報告 第五輯:台湾総督府国勢調

- 査報告』復刻版，文生書院。
- 『台湾日日新報』1935年2月23日付，「女中さん講習会 押し売りの撃退も教へる」。
- 竹中信子（2001）『植民地台湾の日本女性生活史』昭和（上）編，田畑書店。
- 高崎宗司（1993）『近代日本と植民地—5 膨張する帝国の人流』岩波書店。
- 陳 惠文（1999）『大稻埕查某人地図 婦女的活動空間—近百年来的變遷』台北：博揚文化出版公司。
- 辻 弘（1985）『竹富島いまむかし』。
- 土屋米吉（1938）「銃後の台湾職業婦人界」（『台湾婦人界』昭和13年，第5巻第1号），56-61頁。
- 永岡正己（2001）「日本統治下台湾社会事業史研究の意義と課題」（大友昌子・沈 潔編『植民地社会事業関係資料集・台湾編 別冊』近現代資料刊行会），5-42頁。
- 波形昭一（2004）「植民地期台湾における日本人商工業者の存在形態—1930年前後の台北市を中心に」（日本台湾学会第六回大会自由論題報告「植民地期台湾における在台日本人—官僚層と商工業層に着目して—」報告，於：東京大学，2004年6月5日）。
- 野入直美（2006）「第6章 沖縄と台湾の間の双方向的な移動について—日本帝国の南端における境界と関係性—」（蘭 信三編『日本帝国をめぐる人口移動（移民）の諸相研究序説』），131-159頁。
- 又吉盛清（1990）『日本植民地下の台湾と沖縄』沖縄あき書房。
- 又吉盛清（2000）「日本の台湾統治と八重山」（『沖縄・八重山文化研究会報』第101号），1-2頁。
- 松田ヒロ子（2006）「第7章 沖縄県八重山地方から植民地下台湾への人の移動」（蘭 信三編『日本帝国をめぐる人口移動（移民）の諸相研究序説』），161-183頁。
- 松田良孝（2001）「台湾・助産婦・参政権—玉城喜美代の半生 ①～⑱」（『八重山毎日新聞』2001年1月5日-3月4日連載記事）。
- 三浦正夫「むづかしい百貨店経営—進んだ台湾女性」（『台湾婦人界』1933年10月号）。
- 三木 健（2003）『八重山研究の歴史』南山舎。
- 水田憲志（1998）「沖縄県から台湾への移住：第二次世界大戦前における八重山郡出身者を中心として」（関西大学文学部地理学教室編『地理学の諸相—「実証」の地平』）
- 水田憲志（2003）「日本植民地下の台北における沖縄出身「女中」」（関西大学史学・地理学会『史泉』第98号），36-55頁。
- 八重山歴史編集委員会編（1954）『八重山歴史』八重山歴史編集委員会。
- 与那国町老人クラブ連合会編（1991）『与那国町老人クラブ 平成3年度記念誌』。
- 与那国町史編纂委員会事務局編（1997）記録写真集『与那国 沈黙の怒涛』。

「1930年前後の八重山女性の植民地台湾への移動を促したプル要因」(金戸幸子)

与那国暹 (1992) 『与那国物語』ニライ社。

李 承機 (2004) 『台湾近代メディア史序説—植民地とメディア—』東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻博士論文要旨。

琉球新報社編 (1996) 『近代沖縄女性史—時代を彩った女性たち』ニライ社。

(かねと さちこ・東京大学大学院総合文化研究科博士課程院生・社会学, 東アジア研究)

The pull factors of the self-active movement of Yaeyama women to Colonial Taiwan in the around 1930: The colonial modernity and the expansion of occupational fields for women in Taiwan

Sachiko KANETO

Ph.D. Candidate, Graduate School of Arts and Sciences,
Advanced Social and International Studies, The University of Tokyo
(Sociology, East Asian Studies)

Key Words: Yaeyama Women, Colonial Taiwan, Boundary, Colonial Modernity,
Women's occupation

Although there have been few studies on Yaeyama local's migration during the pre Asia-Pacific period, a significant number of people went from there to colonial Taiwan, in particular during the around 1930. Above all, it could be noticed that the percentage of women was significantly high. This article has explored the "pull" factors that Yaeyama women' migration to colonial Taiwan came to be popular during the around 1930 by analyzing former migrants' narratives in autobiographies and my own interview research, and statistical data on the labor and population related to Okinawa, Yaeyama and Colonial Taiwan.

In previous research, the increase of Okinawan migration was mainly explained by the economic analysis of depression during the 1920s and 1930s (Kinjyo, 1974; Ishikawa, 1974: 387). Recent studies point out that Yaeyama locals' migration can not be simply understood in terms of financial profit (Mizuta, 1998, 2003; Matsuda, 2006).

Yet these recent works have been hardly investigated the “pull” factors in colonial Taiwan that spur Yaeyama women into migration. It is necessary to explore the “pull” factors on the time context of colonial Taiwan during the transitional period in analyzing what Yaeyama women acquired through work experience in colonial Taiwan, and how impact on the modernization of Yaeyama.

This article demonstrates that the “pull” factors that made a significant number of Yaeyama women went to colonial Taiwan during the around 1930 mainly as follows: First, there were abundant in opportunities even for lower class laborers to receive education, such as in evening schools and technical schools in colonial Taiwan. Second, with the expansion of the job or occupational fields for women and the change of the labor structure in colonial Taiwan, the labor market abundant in mobility were formed, in addition to mobility particular to immigrant society. These factors of colonial modernity in Taiwan provided more opportunities for them to achieve social promotion through occupation in the context of Japanese empire. It also means colonial Taiwan in the around 1930 that emerging the labor market abundant in mobility was the place to be able to construct the social identity for Yaeyama women.

Eriksson (1973) says that occupation has a great importance in the process of forming personal identity. Needless to say, not all Yaeyama migrants achieved success in Taiwan. Although Yaeyama women in Taiwan sometimes suffered ethnic discrimination from Japanese proper, nevertheless, they were hoping to find a “better life” in Taiwan. It also implies that Yaeyama women took active role as one of the main actors in colonial modernity in Taiwan.

Most Yaeyama women to migrate to colonial Taiwan went back to home island with the salvage by the end of the World War II. Many of them acquired not only Japanese main island life style and standard Japanese language, but also acquired career spirits through the expansion of women’s labor market and their work experience in colonial Taiwan. These spirits and culture led to contribute modernization and reconstruction of Yaeyama local community in the early postwar era.